



三島市・源兵衛川
(昭和32年/撮影:矢部健氏)

水といきる水にあそぶ

●会期
平成13年 7月8日(日) ▶ 9月2日(日)

●会場
三島市郷土資料館(市立公園 楽寿園内)

●主催
富士・沼津・三島3市博物館連絡協議会



ミシマバイカモ



三島市・白滝公園(昭和22年/撮影:須田俊雄氏)

今後の巡回予定

平成13年 9/11(火)~11/11(日)
富士市立博物館 ☎ 0545 (21) 3380

平成13年 11/23(金)~平成14年 2/24(日)
沼津市歴史民俗資料館 ☎ 0559 (32) 6266

水と生きる



ツキヤ(大正初め、現三島市白滝公園の南)

水車

豊富な湧水の流れる川沿いには、ツキヤ(精米屋)が並び立ちました。現在のように電力がなかった頃は、

水車を回した動力を活用しキネを動かし、米をツキました。かつては相当な湧水量がありました。

三島市域では、菰池から始まる御殿川沿いには、その下流の赤橋までの間に、10軒余りの水車が回り、ツキヤ通りの景観を作っていました。富士市域では、湧水の多い原田、永明寺周辺に大正初めには27軒の水車があり、ツキヤ町と呼ばれていました。

カワバタ

川沿いの家では、どこでもカワバタ(川端)を備えていました。岸辺に少し張り出しをこしらえ、そこを足場に水汲み、洗い物などをしました。生活に必要な水は、すべてこのカワバタで間に合わせていました。また子供たちはカワバタへ裸で飛び出して水遊びなどをしました。

水辺に面していない家では、共同のカワバタを利用していました。数人が並んで洗い物ができる大きなカワバタで、それぞれ家から持ち寄った洗い物をそこで洗いました。カワバタは主婦たちの社交場でした。



共同のカワバタ(三島市・三石神社南)



湧水が豊富なところでは、井戸がなくても水に不自由することはなく、洗濯用水・飲用水だけでなく、すべての生活用水に湧水を利用してきました。

湧水を利用する上で、そこに暮らす人々が共有するための、水を汚さない習慣的な決まりがあります。飲み水を汲むのは水神の碑に近い水の湧出口、それより下で洗濯(ゆすぎ)をし、石けんを使って洗う場合には、湧水を家へ運んでタライで洗うか、共用の水場のもっとも下流であることになっているそうです。(富士市・今泉)湧水を利用するところでは、このようなきまりを聞くことができます。

地域により「三尺(1m)下がれば真水になる」、「三寸(10cm)下がればきれいになる」といいます。かつてはそれくらい豊富な水量で、湧水の川の清さに対する信頼の気持ちがありました。

井戸

近くに川や泉がないところでは、共有井戸や個人の屋敷に井戸を掘りました。共有井戸への水汲みは、女性のとくに嫁の仕事でした。実家で井戸水を汲んだことのない嫁は、うまくつるべを使わず、運搬で肩を真っ赤にはらしたといいます。毎朝、水運びの順を待ち、水くみや洗濯などをしながら、うわさや世間話に花を咲かせる井戸端会議も行われ、井戸の回りは賑わいました。

ポンプ式井戸



川の道具

フネ



ハヤビン



ハヤビン 町中を流れる小川でガラス製のハヤビンを使って魚を取りました。餌に鱈節えさ かつおぶしや魚のはらわたを入れ、川に仕掛けたあと、ハヤビンが割れないよう注意しながら、流されないよう石や砂袋で押さえました。

モジリ ウナギやカニを取るために竹で編んだモジリを仕掛けました。餌にはミミズを入れ、流されないように石を載せたり、モジリに鉄の重りをつけて仕掛けました。

フネ プリキで作った舟形の容器で、三島の川沿いの家では、夏の食べ物腐りやすい季節には、このフネの中に食べ物などを入れてカワバタの杭につなぎ、橋の下など直射日光を避ける場所に流しておきました。一年中低温のまま水温が一定だった三島の湧水の川は、天然の冷蔵庫代わりになりました。下流に住む子どもたちにとっては、フネが流されてくるのが楽しみだったそうです。川にフネを浮かせている風景は、三島の川沿いの生活を代表する風景でした。富士市内でも同様にトタンで作った容器（ドウコカンとも呼ばれる）が、現在も利用されています。

水にあそぶ

川のほとりに、動植物が豊かに息づく水辺のあったころ、子どもたちは、夏になると川へ出かけ、段のある岩などから飛び込みをしました。川辺では「箱めがね」で水中の魚を探し、もりで突いて捕ったり、川の瀬に追い込み堰せきを作り、ウグイなどを捕りました。

街中の川で遊ぶには、上級生から川の石や欠けた茶碗などを拾うよう指示されたこともあり、川の中は安全できれいに保たれていました。



水あそび 昭和10年頃（三島市菰池）

川の幸 【カニ汁】

川沿いの家にはカニモジリがあり、夕方川へ仕掛け、朝モクスガニ（ズガニ、ケガニ）が入っていればその晩はカニ汁となりました。モジリ一つあれば充分一家の食べる量がまかなえました。狩野川台風（1958・昭和33年）以前までは夏の夕暮れ「トントン トントン」とカニ叩きの音がたえませんでした。よく叩いてみそとまぜて擦り、たいていはみそ汁へ叩いたカニをどっど入れて、かきまぜて少し煮るだけで美味しく、よく叩くと殻ごと食べられました。カニを一度湯で蒸してから酒で蒸しなおす酒蒸しなど、カニのさまざまな調理法が各家庭にあるようです。近年はズガニがへり、カニ叩きの音もあまり聞かれなくなりました。



モクスガニ

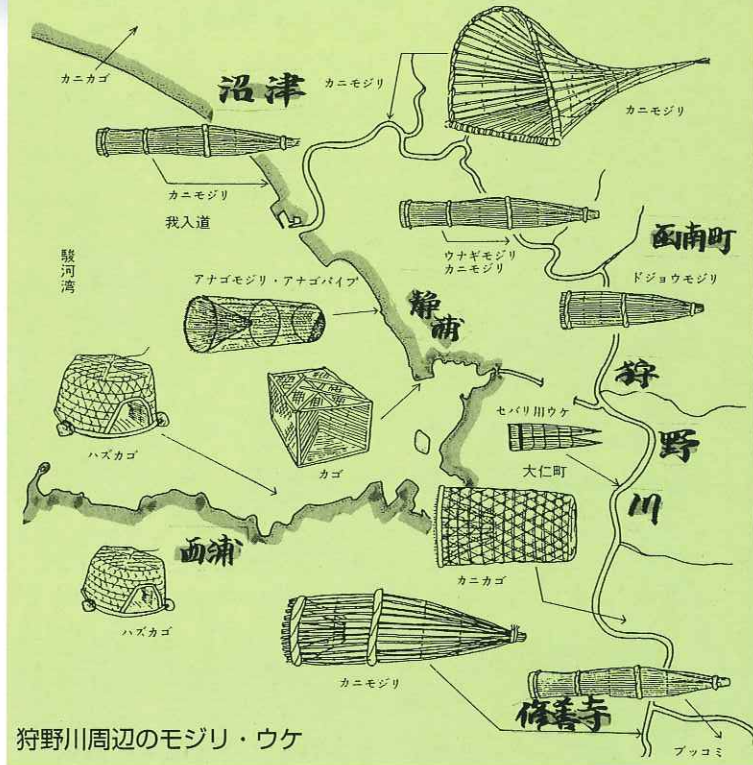
川から海へ

狩野川は、伊豆の中心付近に位置する天城山系に源を発し、南北に細長い形状を呈した河川で、その流域面積は852km²に達しています。水源である天城連山は、雨の多い地域で年間降雨量はおよそ3000mmをこえます。さらに、富士山からの伏流水を合わせたその水は、清流として知られています。そのためヤマセミ、ハコネサンショウウオ、ルイロトンボといった生物をはじめ80種類以上の生物、例えば上流にはアマゴ（狩野川ではヤマメと呼ばれている）、中流域にはウグイやオイカワの仲間が住み、海からもアユがこの流域にまで遡ってきます。中、下流域にはコイ、フナ、河口付近にはハゼ、ボラ、スズキ等海の魚も生息しています。中でもアユは全国でも有数の魚影が濃い川として、また友釣りの発祥地として有名です。

このような、川の流れの違いや魚種の違いに応じて、狩野川では海と同様に網漁、釣り漁などの様々な漁が営まれてきましたが、川という限られた条件の中で昔ながらの独特な漁法が最近まで伝えられています。

例えば下流域で行われていたコイ網漁は沼津の内浦で行われたマグロの建切網漁法に似ており、川漁の中でも海の影響を強く受けた下流域独特の漁法でした。中流域では、落ちアユを対象に秋から冬にかけてセバリ漁が行われています。これは流れを網で仕切り岸辺の近くに網囲いを作って笊を仕掛けるものです。笊は、狩野川流域では、河口周辺の沼津から中流域までは「モジリ」と呼ばれています。上流域では、流れを利用して落とし込んで捕る形式の大型のものを「モジリ」、エサを入れて誘い込む形式のものを「ウケ」と呼んでいます。上、中流域ではウケ、モジリを併用して用いています。このように狩野川では笊を使ってウナギ、アユ、コイ、ウグイ、カニ等が捕られています。

しかし、狩野川の果たした役割は漁撈の場だけにとどまらず、流域内外の様々な物資を往還させる交通路でもありました。例えば鎌倉時代には支流の黄瀬川には川津や宿場が栄え、江戸時代には大仁あたりまで舟が遡ったと言われています。近代にはいと永代橋のたもとに、沼津港、

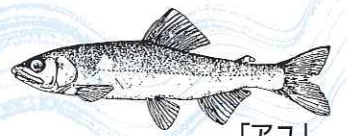


狩野川周辺のモジリ・ウケ

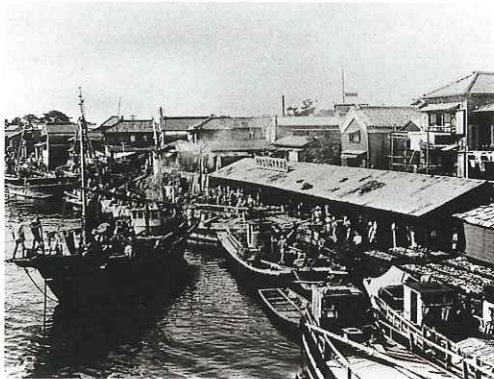
【狩野川通信】より



狩野川の笊



「アユ」



昭和初期の魚河岸

魚河岸があり、マグロやカツオがよく捕れた三浦地区（静浦・内浦・西浦）の漁師達は、焼き玉エンジンの船に魚をのせて魚河岸に魚を運んだと言います。狩野川は交通の要所として、また商業活動の場としても賑わいをみせていました。

このように、人々は古くから川と密接な関わりを持ち続けてきましたが、近代に入り鉄道や道路網が整備され、また、最近では水質の悪化も加わって、その繋がりが薄れてきました。そうした中、沼津市では川辺を核としたセントラル・パーク構想や、舟運の再開など、その結びつきを復活させる動きがあります。

水への思い

水が私たちにとって何よりも大切なものであることは、豊富な湧水を持つ地域でも、水のない地域でも変わりはありません。その証として、水源となる場所には「水神」が祀られ人々の感謝の心をうかがい知ることができるからです。しかし、その思いの大きさには地域によって違いがあるようです。富士市で水道が布設されたときの感想のなかで、湧水のある地域では「水道なんて無駄な事するね。」「用心に（水道を）引いとくか。」と答えているのに対し、長年水を求めてきた地域の人たちからは「まるで夢のようだった。」「生まれてこの方こんなに感謝したことはなかったね。」と対照的な答えが返ってきました。

この違いでもわかるように、水の枯渇への日常的な不安は神仏への信仰心となり、水神や雨乞いをはじめとする様々な形になって現れています。

富士市神戸の雨乞曼陀羅 ごとう 曼陀羅地区（神戸2丁目）旧6月12日

「昔、日蓮が富士山で修行をしていたとき、この付近で水を求めたが日照り続きの雨乞い中で人々は水を分け与えなかった。しかし、この地区のおばあさんが水を与えた。日蓮は曼陀羅を書いて楠の木に吊したところ雨が降り始めた。」

この伝えにいう雨乞いの場所が今の曼陀羅祖師堂で、日蓮が書いたという曼陀羅が「雨乞曼陀羅」です。その年の当番組となった男達が三ツ倉の法蔵寺まで「雨乞曼陀羅」と僧を迎え、世話人宅で接待した後、ウチワダイコを叩きながら「南無妙法蓮華経」



雨乞曼陀羅のご開帳

を唱え、曼陀羅祖師堂に向かい「雨乞曼陀羅」は開帳されます。（昔は午前0時に開帳）雨乞曼陀羅への信仰は厚く、日照りの際他の地区に頼まれて「雨乞曼陀羅」を開帳したこともあったそうです。また、日蓮にかかわる雨乞いの行事は、地域の宗派に関係なく、富士・富士宮地区の山間の集落に広く分布しています。

雨乞い行事（雨乞いの竜）



雨乞いの竜

三島市坂地区（三ツ谷、山田）や沼津市黄瀬川下流域（日吉、下石田、岡一色）では、水不足の時に雨乞い行事を行っていました。7月末から8月の日照りが続く時、大きいものでは6メートル近くの巨大な竜を作りました。竜は集落の男衆が総出で麦わらや藁、あるいは縄で編んで作ったものです。竜をかついで神社や寺で雨乞いの祈願を行い、山田川や狩野川に流したり、川辺や門池かどいけに置かれました。山田では滝を昇らせたと言います。

水道やポンプが普及し始めた昭和30年代よりこうした雨乞い行事は見られなくなりました。

水への信仰（水神講・不動講）

水に苦勞した多くの地域では、水の神に感謝を表わす「水神講」「不動講」を催しています。

1月下旬に、「不動講」が催され、水神に対する感謝が示され、ご詠歌を上げ、オフルマイとなります。

三島市三ツ谷・市山いちのやま両区では「水神講」として1月27日に水道組合役員が、江戸時代から使われている山奥の11ヶ所の水源地・井戸を回り、各所でしめ縄を張り、酒・米・塩を捧げます。先祖代々からの水を求め続けた苦勞をこうして語り継いでいるのです。

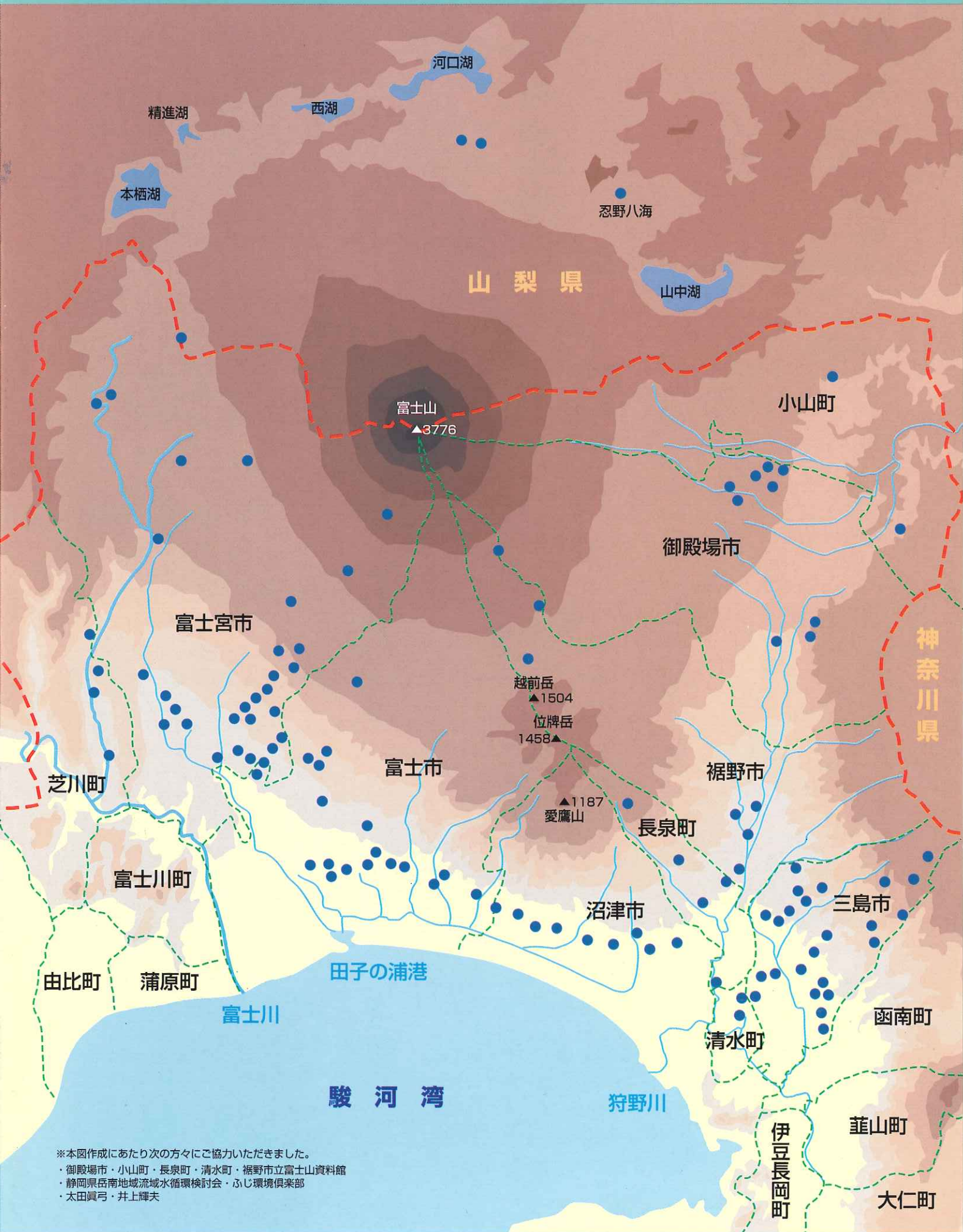


山中（三島市）の不動講

三ツ谷・市山（三島市）の水源地



富士山周辺湧水ポイント



※本図作成にあたり次の方々にご協力いただきました。
 ・御殿場市・小山町・長泉町・清水町・裾野市立富士山資料館
 ・静岡県岳南地域流域水循環検討会・ふじ環境倶楽部
 ・太田眞弓・井上輝夫

水のない 暮らし

私たちのまちは、富士・愛鷹・箱根^{やまあい}の山間から、駿河湾に接する海岸まで、豊かな自然と清らかな湧水に恵まれたまちとして知られています。しかし、このような私たちのまちにも、かつて水の確保に努力しなければならない山間の集落が数多くありました。

水は生命です。湧水のない地域にとって飲み水などの生活用水の確保は何よりも大切な仕事だったのです。山の絞れ水や比較的水量の多い沢や川から数十kgもある水桶をかつぎ、何往復もして水を蓄えることは大変な重労働でした。しかし、この水汲み仕事がなぜか嫁や子供の仕事とされていたことから、娘を持つ親としては「〇〇には嫁にやらない。」とまで言われていました。

明治から大正の始め頃になると水源地从ら、竹や土管を通して一カ所に貯水し、その貯水槽から、同様に各家庭や低地の村々に分水するようになりました。しかし、水源のない村では家庭で雨水をためる天水タンクを造ったり、井戸掘りが可能な場所に各村の共同井戸を掘削して水の蓄えに努力していました。

天水タンクの水はボーフラが涌くため、中に金魚を飼ったり、タンクの縁をたたいてボーフラが沈んだところで水をすくったり、杓を水面で振って、ほこりをはらい、煮沸してから飲むといった、今では考えられない生活が近年まで続いていたようです。もちろん風呂の水は減多に替えることができませんから、「線香立つまで風呂入る」などと言われていたようです。

このような僅かな水に村人の命を預けていることから、簡易水道や上水道の整備される近年まで、水の確保をめぐる村どうしの争いも少なくなかったようです。



共同井戸（富士市片倉西）



雨水タンク（富士市一色）

水のある 暮らし

富士・愛鷹・箱根山麓の標高10m～20mあるいは20m～30m付近には多くの湧水地点があります。（地図参照）

特に富士市吉原地区、沼津市根方地区、三島市駅南地区には多くの湧水が見られ、古くから人々の生活や産業に活用されてきました。

富士市今泉のガマと呼ばれる湧水地帯では、湧水口付近に共用の水場が作られ、飲用水・野菜洗い・洗濯用水などに利用されています。

沼津市井出では、湿田から伏流水が湧いており、ワキドと呼ばれています。大きなものをカマと呼び、子供が泳いだり、フナなどの釣り場として利用されていました。

三島市街地では、小浜池・浅間神社・白滝公園からの湧水が水路によって縦横に分かれ、住居の裏庭に引き込まれていました。河川の沿岸にはカワバタと呼ばれる階段が各所にあり、洗濯場・女性の社交場であり、冷蔵庫代わりのフネ（ブリキ製）を杭につけ水面に流していたものでした。

豊かな湧水を利用して、富士市では製紙業が発達し、三島市では染色業や和傘製造が盛んとなりました。



三島市源兵衛川の共同
カワバタ風景（昭和30年頃）



富士市比奈丸池の洗濯風景（平成4年）

水の未来

泉の里 富士 (富士市)

富士市は全国でも「製紙業のまち」として知られています。これも富士山がもたらす清らかで豊富な湧水や地下水があるからこそ成り立つ産業です。しかし、昭和30年代後半からの高度成長期に岳南地域では工業用水の急増に伴う、地下水の過剰な汲上げによる塩水化が発生してしまいました。

これに対応するため、地下水の取水量の規制や工業用水のリサイクルを考え、芝川町の芝富発電所の発電放水を利用する「富士川工業用水道」の他、富士・清水・静岡・富士川・由比・蒲原の3市3町で蒲原町の日本軽金属の発電放水を利用する「東駿河湾工業用水道」を建設し、貴重な地下水保護に乗り出しました。製紙業界では水の使用量を減らす技術開発に努力した結果、塩水化は緩やかに改善されてゆきましたが、完全解決には至っていません。また、工場廃水の浄化への努力を重ねてきました。このような企業努力に刺激され、市民レベルでの水への意識の高まりが、生活廃水の浄化や親水をテーマとした公園整備につながり、かつての公害のまちも本来の豊富な湧水に親しむ「水の都」へと変化しつつあります。



たじゆくかわ
田宿川のたらい流し川まつり
提供：富士市広報広聴課

水辺の憩いとにぎわいを目指して「沼津セントラルパーク構想」(沼津市)



この構想は第3次沼津市総合計画('01~10)「人が輝く躍動のまち」の基本計画に位置づけられました。街の中心を悠々と流れる狩野川。この狩野川べりは多くのイベントで賑わい、また静かなひとときを楽しむ空間として市民に親しまれています。沼津市では、沼津ならではのこの場所にさらに多くの人々が集い、やすらぎの空間とするため「沼津セントラルパーク」構想を検討しています。キーワードは水辺です。次の五つの方針に基づき具体的整備を検討中です。1. 水辺を結ぶ(狩野川舟運の復活や兩岸の歩道散策路の整備など)

2. 水辺に憩い、集う、遊ぶ(中央公園の活用や川廊通りの石畳舗装など) 3. 水辺を美しく(橋のライトアップなど) 4. 水辺に文化を(水辺でのイベント開催と併せて沼津の歴史、文学検証スポットの創造など) 5. 水辺から発進する(中心市街地と沼津港、香貫山など周囲のにぎわいスポットを結びます。)

せせらぎの街づくり (三島市)

昭和30年代まで市内各所で豊かな湧水が噴出していましたが、地下水上流部に多くの工場が建ち、大量の地下水を汲み上げ始めたため、湧水量が激減し、河川も汚れてしまいました。

美しい水を蘇らせるため三島市では平成6年から地下水流動メカニズムの調査を行い解明してきました。同時に、市民とともに地下水涵養及び節水対策に取り組んでいます。「雨水浸透マス」「節水コマ」の一般家庭への普及、「道路浸透舗装」、水源涵養林の保全・育成、あるいは工業用水の回収水を河川に流し、源兵衛川はこれにより復活しました。

現在は「街中がせせらぎ事業」を展開し、「歩きたい街」「住みたい街」をスローガンに市民と行政が協力して、環境改善運動を進めています。主な水路周辺は「水辺のプロムナード整備」を行い市民の散歩道となっています。



源兵衛川で遊ぶ子供達